本資料のうち、枠囲みの内容 は商業機密の観点から公開で きません。

女川原子力発電所第2号	号機 工事計画審査資料
資料番号	02-工-B-19-0083_改 2
提出年月日	2021年10月29日

VI-2-4-3-1-1 燃料プール冷却浄化系熱交換器の耐震性についての計算書

2021年10月

東北電力株式会社

目 次

| 1. | 概 | 要 … | | | • • • | | | | | | |
 | 1 |
|------|------|-----|--|---------|-----------|----|----|-----|----|------------|--------------|------|------|------|------|------|------|------|------|----|
| 2. | | 般事 | 項 … | | • • • • | | | | | | |
 | 1 |
| 2. | 1 | 構造 | 計画 | | | | | | | | |
 | 1 |
| 3. | 古 | 有周 | 期 · · · | | | | | | | | |
 | 3 |
| 3. | 1 | 固有 | 周期の | の計算 | 算・ | | | | | | |
 | 3 |
| 4. | 構 | 造強力 | 度評価 | ; · · · | | | | | | | |
 | 4 |
| 4. | 1 | 構造 | 造強度語 | 平価に | 方法 | | | | | | |
 | 4 |
| 4. | 2 | 荷重 | この組代 かんしゅう かいしゅう しゅう しゅう しゅう しゅう しゅう しゅう しゅう しゅう しゅう | うせ! | 及び | 許容 | 応 | 力 · | | | |
 | 4 |
| 4 | 1. 2 | . 1 | 荷重の | の組合 | 合せ | 及ひ | 許 | 容応 | 力 | 伏態 | . |
 | 4 |
| 4 | 1. 2 | . 2 | 許容师 | 芯力 | | | | | | | |
 | 4 |
| 4 | 1. 2 | . 3 | 使用相 | 才料の | の許 | 容応 | 力詞 | 評価 | 条 | 牛… | |
 | 4 |
| 4. | 3 | 計算 | 多 条件 | | | | | | | | |
 | 4 |
| 4. 4 | 1 | 疲労危 | 解析評 | 価· | | | | | | | |
 | 9 |
| 5. | 評 | 価結 | 果 … | | | | | | | | |
 | 11 |
| 5. | 1 | 重大 | 事故等 | 等対象 | 心設 | 備と | し | ての | 評値 | 洒 結 | ·果· |
 | 11 |

1. 概要

本計算書は、添付書類「VI-2-1-9 機能維持の基本方針」にて設定している構造強度の設計方針に基づき、燃料プール冷却浄化系熱交換器が設計用地震力に対して十分な構造強度を有していることを説明するものである。

燃料プール冷却浄化系熱交換器は、重大事故等対処設備においては常設耐震重要重大事故防 止設備に分類される。以下、重大事故等対処設備としての構造強度評価を示す。

なお、燃料プール冷却浄化系熱交換器は、添付書類「VI-2-1-13 機器・配管系の計算書作成の方法」に記載の横置一胴円筒形容器と類似の構造であるため、添付書類「VI-2-1-13-2 横置一胴円筒形容器の耐震性についての計算書作成の基本方針」に基づき評価を実施する。

また、「4.4 疲労解析評価」にて示す方法にて疲労解析評価を実施する。

2. 一般事項

2.1 構造計画

燃料プール冷却浄化系熱交換器の構造計画を表 2-1 に示す。

表 2-1 構造計画

計画の	機要	概略構造図
基礎・支持構造	主体構造	(风 呵)
胴を2個の脚で支持し、脚をそれぞれ基礎ボルトで基礎に据え付ける。	横置一胴円筒形容器(水室側及び胴側に、鏡板を有する横置一胴円筒形容器)	5415 <u>胴板</u> 基礎ボルト
		(単位:mm)

3. 固有周期

3.1 固有周期の計算

理論式により固有周期を計算する。固有周期の計算に用いる計算条件は、本計算書の【燃料 プール冷却浄化系熱交換器の耐震性についての計算結果】の機器要目に示す。

計算の結果,固有周期は 0.05 秒以下であり,剛であることを確認した。 固有周期の計算結果を表 3-1 に示す。

	表 3-1	固有周期	(単位:s)
水平方向			
鉛直方向			

4. 構造強度評価

4.1 構造強度評価方法

燃料プール冷却浄化系熱交換器の構造強度評価は、添付書類「VI-2-1-13-2 横置一胴円筒 形容器の耐震性についての計算書作成の基本方針」に記載の耐震計算方法に基づき行う。な お、水平地震動による応力と鉛直地震動による応力の組合せには絶対値和を適用する。

4.2 荷重の組合せ及び許容応力

4.2.1 荷重の組合せ及び許容応力状態

燃料プール冷却浄化系熱交換器の荷重の組合せ及び許容応力状態のうち重大事故等対処 設備の評価に用いるものを表 4-1 に示す。

4.2.2 許容応力

燃料プール冷却浄化系熱交換器の許容応力は,添付書類「VI-2-1-9 機能維持の基本方針」に基づき,表 4-2 及び表 4-3 のとおりとする。

4.2.3 使用材料の許容応力評価条件

燃料プール冷却浄化系熱交換器の使用材料の許容応力評価条件のうち重大事故等対処設備の評価に用いるものを表 4-4 に示す。

4.3 計算条件

応力計算に用いる計算条件は、本計算書の【燃料プール冷却浄化系熱交換器の耐震性についての計算結果】の設計条件及び機器要目に示す。

表 4-1 荷重の組合せ及び許容応力状態 (重大事故等対処設備)

施設	'区分	機器名称	設備分類*1	機器等の区分	荷重の組合せ	許容応力状態
核燃料物質					$D + P_D + M_D + S s^{*3}$	IV _A S
の取扱施設 及び貯蔵施 設	使用済燃料貯 蔵槽冷却浄化 設備	燃料プール冷却浄化系	常設耐震/防止	重大事故等 クラス 2 容器* ²	$D+P_{SAD}+M_{SAD}+S$ s	V _A S (V _A S として IV _A S の許容限界 を用いる)

注記*1:「常設耐震/防止」は常設耐震重要重大事故防止設備を示す。

*2: 重大事故等クラス2容器の支持構造物を含む。

*3: $\lceil D + P_{SAD} + M_{SAD} + S_S \rfloor$ の評価に包絡されるため、評価結果の記載を省略する。

表 4-2 許容応力(重大事故等クラス 2 容器)

		許容隆	很界 ^{*1,*2}					
許容応力状態	一次一般膜応力	一次膜応力+ 一次曲げ応力	一次+二次応力	一次+二次+ ピーク応力				
${ m IV}_{ m A}{ m S}$			基準地震動Ssのみによる疲労解析を行い、疲労累積係数2					
V _A S (V _A S として IV _A S の 許容限界を用いる)	0.6 • S u	左欄の 1.5 倍の値	ただし、地震動のみによる一次下であれば、疲労解析は不要。	+二次応力の変動値が2・S y以				

注記*1:座屈による評価は、クラスMC容器の座屈に対する評価式による。

*2: 当該の応力が生じない場合、規格基準で省略可能とされている場合及び他の応力で代表可能である場合は評価を省略する。

表 4-3 許容応力 (重大事故等クラス 2 支持構造物)

	許容限界* ^{1,*2} (ボルト等以外)	許容限界* ^{1,*2} (ボルト等)						
許容応力状態	一次応力	一次応力						
	組合せ	引張り	せん断					
IV _A S								
V _A S (V _A S としてIV _A S の許容限界 を用いる)	1.5 • f _t *	1.5 • f _t *	1.5 • f _s *					

注記*1:応力の組合せが考えられる場合には、組合せ応力に対しても評価を行う。

*2: 当該の応力が生じない場合、規格基準で省略可能とされている場合及び他の応力で代表可能である場合は評価を省略する。

_ ,

O 2 ② VI-2-4-3-1-1 R 1

表 4-4 使用材料の許容応力評価条件(重大事故等対処設備)

評価部材	材料	温度条 (℃)	温度条件 (℃)						S _y (MPa)	S u (MPa)	S _y (RT) (MPa)
胴板	SGV410	最高使用温度	70	_	210	380	_				
脚	SS400 (厚さ≦16mm)	周囲環境温度	66	_	234	385	_				
基礎ボルト	SS400 (16mm<径≦40mm)	周囲環境温度	66	_	225	385	-				

4.4 疲労解析評価

胴の応力評価において、一次応力と二次応力の和の変動値が設計降伏点S_yの2倍を上回る場合には、設計・建設規格 PVB-3300に規定された簡易弾塑性評価方法に基づき、疲労解析評価を実施する。

なお、疲労解析評価に用いる基準地震動Ssの等価繰返し回数N。は、<mark>設備ごとに個別に設</mark> 定した とする。

(1)繰返しピーク応力強さ

繰返しピーク応力強さS_ℓは、次式により求める。

K。: 次の計算式により計算した値

a. $S_n < 3 \cdot S_m$ の場合 $K_e = 1$

- b. S_n≧3・S_mの場合
- (a) K < B₀の場合

(b) K≧B₀の場合

ここで,

q, A₀, B₀:下表に掲げる材料の種類に応じ, それぞれの同表に掲げる値

材料の種類	q	Α 0	Во
低合金鋼	3. 1	1.0	1. 25
マルテンサイト系ステンレス鋼	3. 1	1.0	1. 25
炭素鋼	3. 1	0.66	2. 59
オーステナイト系ステンレス鋼	3. 1	0.7	2. 15
高ニッケル合金	3. 1	0.7	2. 15

S_n:一次応力と二次応力を加えて求めた応力解析による応力強さのサイクルにおいて、その最大値と最小値の差

 $S_m: 2/3 \cdot S_v$

K。: 弾塑性解析に用いる繰返しピーク応力強さの補正係数

Sը: 地震荷重のみにおける一次+二次+ピーク応力の応力差範囲

S&:繰返しピーク応力強さ

(2) 運転温度における繰返しピーク応力強さの補正

縦弾性係数比を考慮し、繰返しピーク応力強さS』を次式により補正する。

 $S_{\ell}' = S_{\ell} \cdot E_{0} / E$

S_ℓ':補正繰返しピーク応力強さ

E o : 縦弾性係数

E:運転温度の縦弾性係数

(3) 疲労累積係数

疲労累積係数Ufが次式を満足することを確認する。

 $U_f = \Sigma (N_c/N_a) \leq 1.0$

N_a: 地震時の許容繰返し回数 N_c: 地震時の等価繰返し回数

なお、許容繰返し回数の算出には、設計・建設規格 「表 添付 4-2-1 炭素鋼、低合金鋼 および高張力鋼の設計疲労線図(図 添付 4-2-1)のデジタル値」より求めた値を用いる。

5. 評価結果

5.1 重大事故等対処設備としての評価結果

燃料プール冷却浄化系熱交換器の重大事故等時の状態を考慮した場合の耐震評価結果を以下に示す。発生値は許容限界を満足しており、設計用地震力に対して十分な構造強度を有していることを確認した。

(1) 構造強度評価結果

構造強度評価の結果を次頁以降の表に示す。

1.1 設計条件

606 円 々 44-	耐震重要度分類	預据付場所及び床面高さ (m)	固有周期(s)		弾性設計用地震動 S d 又は静的震度		基準地別	통動Ss	最高使用圧力	最高使用温度	周囲環境温度
機器名称			水平方向	鉛直方向	水平方向 設計震度	鉛直方向 設計震度	水平方向 設計震度	鉛直方向 設計震度	(MPa)	(℃)	(℃)
燃料プール冷却浄化系 熱交換器	常設耐震/防止	原子炉建屋 0. P. 15. 00			l	_	С _Н =1.97	$C_{v} = 1.37$	1. 18	70	66

1.2 機器要目

1.2 仅有6女	ς H					_					
m ₁ (kg)	m ₂ (kg)	m ₃ (kg)	m ₄ (kg)	m ₅ (kg)	m ₆ (kg)						l 6
											L L 5
ℓ ₁ (mm)	Q ₂ (mm)	0 ₃ (mm)	ℓ ₄ (mm)	ℓ ₅ (mm)	ℓ ₆ (mm)	M_1 $(N \cdot mm)$	M ₂ (N • mm)	R 1 (N)	R ₂ (N)		<u> </u>
-971	-441	0	1300	2600	3328	7. 971×10^6	5. 690×10^6	2. 143×10^4	1. 720×10^4		m ₁ m ₂ m ₃ m ₄ m ₅ m ₆
m o	m _{S 1}	m _{S2}	D i	t	t e	ℓ o	h 1	h 2	θ w	$\ell_{ m w}$	
(kg)	(kg)	(kg)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(rad)	(mm)	
4177	119	119	600	12. 0	12.0*1	2600	444	600	0.001	50	7000000000000000000000000000000000000
	ı		I	I	ı	ı		1			
C 1 (mm)	C ₂ (mm)	I s x (mm ⁴)	I s y (mm ⁴)	$Z_{\text{s x}}$ (mm^3)	$Z_{\text{s y}}$ (mm ³)	θ _O (rad)	θ (rad)				
270	150	1. 009×10^9	2. 099×10^8	3. 736×10^6	1. 400×10^6	2. 096	1. 395				
								-			Q1 Lo

12

S v (胴板)

(MPa)

210*3

F*(脚)

(MPa)

270

F (脚)

(MPa)

_

A_{S} (mm^2)	Es (MPa)	Gs (MPa)	A_{S1} (mm ²)	A_{S2} (mm^2)	A_{S3} (mm^2)	$A_{S4} \atop (mm^2)$					
2.586×10^4	200000*4	77100*4	7. 238×10^3	1. 650×10^4	6. 064×10^3	1.410×10^4					
K 1 1 *2	K_{12}^{*2}	K 2 1 *2	K 2 2 *2	$K_{\ell 1}$	$K_{\ell 2}$	K c 1	K c 2	C 0 1	$C_{\ell 2}$	C c 1	C c 2
		_	_								
		_	_						ш		ш
			T		T			T		ı	
S	n	n 1	n 2	a (mm)	b (mm)	d (mm)	A_b (mm^2)	d ₁ (mm)	$\frac{d_{2}}{(mm)}$		
15	4	2	2	400	600	30 (M30)	706. 9	50	120		

S u (脚)

(MPa)

385*4

注記*1:本計算においては当板を無効とした。

S u (胴板)

(MPa)

380*3

*2:表中で上段は一次応力、下段は二次応力の係数とする。

S (胴板)

(MPa)

S _y (脚)

(MPa)

234*4

(厚さ≦16mm)

*3:最高使用温度で算出 *4:周囲環境温度で算出 F(基礎ボルト)

(MPa)

_

F*(基礎ボルト)

(MPa)

270

S u (基礎ボルト)

(MPa)

385*4

S _y (基礎ボルト)

(MPa)

225*4

(16mm<径≦40mm)

1.3 計算数値

1.3.1 胴に生じる応力 (1)一次一般膜応力

(単位:MPa)

地震の種類	弾性設計用地震動Sd又は静的震度					基準地震	통動Ss	
地震の方向	長手方向		横方向		長手方向		横方向	
応力の方向	周方向応力	軸方向応力	周方向応力	軸方向応力	周方向応力	軸方向応力	周方向応力	軸方向応力
内圧による応力	_	_	_		$\sigma_{\phi 1} = 31$	$\sigma_{x1} = 16$	$\sigma_{\phi 1} = 31$	$\sigma_{x1} = 16$
内圧による応力 (鉛直方向地震時)	_	_	_	_	$\sigma_{\phi 2} = 0$	_	$\sigma_{\phi 2} = 0$	_
運転時質量による長手方向曲げ モーメントにより生じる応力	_	_	_	_	_	σ _{x2} =22	_	σ _{x2} =22
鉛直方向地震による長手方向曲げ モーメントにより生じる応力	_	_	_	_	_	σ _{x6} =29	_	σ _{x6} =29
長手方向地震により胴軸断面 全面に生じる応力	_	_	_	_	_	σ _{x413} =4	_	_
組合せ応力	-	_		_	σορ	=69	σ _{0 с}	=66

(2)一次応力 (単位:MPa)

	地震の種類	弾	弾性設計用地震動Sd又は静的震度				基準地震	戛動Ss		
	地震の方向	長手方向		横方向		長手方向		横方向		
	応力の方向	周方向応力	軸方向応力	周方向応力	軸方向応力	周方向応力	軸方向応力	周方向応力	軸方向応力	
内圧に	よる応力	_	_	İ		$\sigma_{\phi 1} = 31$	$\sigma_{X1} = 16$	$\sigma_{\phi 1} = 31$	$\sigma_{x1} = 16$	
	よる応力 向地震時)	_	_	_	_	$\sigma_{\phi 2} = 0$	_	$\sigma_{\phi 2} = 0$		
モーメントに	にる長手方向曲げ より生じる応力	_	_			_	$\sigma_{x2}=22$	_	$\sigma_{x2}=22$	
	よる長手方向曲げ より生じる応力	_	_			_	$\sigma_{x6} = 29$	_	$\sigma_{x6} = 29$	
	による脚反力 Eじる応力	_	_	ĺ		$\sigma_{\phi 3} = 13$	$\sigma_{x3} = 13$	$\sigma_{\phi 3} = 13$	$\sigma_{x3} = 13$	
	震による脚反力 Eじる応力	_	_		_	$\sigma_{\phi 71} = 18$	$\sigma_{x71} = 18$	$\sigma_{\phi 71} = 18$	$\sigma_{x71} = 18$	
水平方向地震	引張り			_	_	$\sigma_{\phi 4 1 1} = 36$ $\sigma_{\phi 4 1 2} = 7$	$\sigma_{x411} = 17$ $\sigma_{x412} = 7$	σ _{φ 5 1} = 27	$\sigma_{x 5 1} = 75$	
による応力		_	_			$\sigma_{\phi 4 1} = 42$	$\sigma_{x 4 1} = 27$			
せん断		_	<u>-</u>				τ ₀ =11		$\tau_{\rm c} = 4$	
組合	せ応力	_	_	_		σ 10	=127	σ _{1 с}	=171	

14

(3) 地震動のみによる一次応力と二次応力の和の変動値

(単	1-1-	11	Pa)	
	11/	 IVI	rai	

	地震の種類 弾性設計用地震動 S d 又は静的震度					基準地別	통動Ss			
	地震の方向	長手方向		横方向		長手方向		横方向		
	応力の方向	周方向応力	軸方向応力	周方向応力	軸方向応力	周方向応力	軸方向応力	周方向応力	軸方向応力	
	による応力 方向地震時)	_	_	_	_	σ φ2=0	_	$\sigma_{\phi 2} = 0$	_	
	震による長手方向 トにより生じる応力	_	_	_	_	_	σ _{x6} =29	_	$\sigma_{x6} = 29$	
	鉛直方向地震による脚反力		_	_	_	$\sigma_{\phi 71} = 18$	$\sigma_{x71} = 18$	$\sigma_{\phi 71} = 18$	$\sigma_{x71} = 18$	
により)生じる応力	_	_	_	_	$\sigma_{\phi 7 2} = 66$	$\sigma_{x72} = 38$	$\sigma_{\phi 7 2} = 66$	$\sigma_{x72} = 38$	
		_	_	_	_	$\sigma_{\phi 4 1} = 42$	$\sigma_{x41} = 27$	$\sigma_{\phi 51} = 27$	$\sigma_{x 5 1} = 75$	
	引張り	_	_			$\sigma_{\phi 421} = 50$	$\sigma_{x 4 2 1} = 98$			
水平方向地震 による応力	91000	_	_	_	_	$\sigma_{\phi 422} = 26$	$\sigma_{x422}=15$	$\sigma_{\phi 5 2} = 227$	$\sigma_{x52} = 106$	
. 3. 3/2/3		_	_			$\sigma_{\phi 42} = 75$	$\sigma_{x42} = 113$			
	せん断	_	_		_		τ ₀ =11		τ c = 4	
組	組合せ応力			_		σ _{2ℓ} =456		σ _{2c} =675		

1.3.2 脚に生じる応力

(単位:MPa)

	地震の種類	弾性設計用地震動	Sd又は静的震度	基準地震動 S s	
	地震の方向	長手方向	横方向	長手方向	横方向
運転時質量による応力	圧縮	_	_	$\sigma_{S1} = 1$	$\sigma_{S1}=1$
鉛直方向地震による応力	圧縮	_	_	$\sigma_{84}=2$	$\sigma_{84}=2$
水平方向地震による応力	曲げ	_	_	$\sigma_{S2} = 14$	$\sigma_{83}=8$
水半刀円地展による心刀	せん断	_	_	$\tau_{S2} = 14$	$\tau_{S3}=4$
組合せ応力	ħ	_	_	σ _{Sℓ} =28	$\sigma_{Sc} = 11$

1.3.3 基礎ボルトに生じる応力

(単位:MPa)

	地震の種類 弾性設計用地震動Sd又は静的震度			基準地震動 S s		
	地震の方向	長手方向	横方向	長手方向	横方向	
鉛直方向地震及び 水平方向地震による応力	引張り	_	_	σ _{b1} =48	$\sigma_{b2} = 48$	
水平方向地震による応力	せん断	_	_	τ _{b 1} = 29	τ _{b2} =16	

15

16

- 1.4 結論
- 1.4.1 固有周期 (単位: s)

方向	固有周期					
長手方向	T 1=					
横方向	T 2=					
鉛直方向	T 3=	•				

1.4.2 応力 (単位:MPa)

4-17-14-1	T-F-Pol	- - 1 .	弾性設計用地震動	Sd又は静的震度	基準地震動 S s		
部材	材料	応力	算出応力	許容応力	算出応力	許容応力	
	_		_	_	$\sigma_{0} = 69$	$S_a = 228$	
胴板	SGV410	一次	_	_	$\sigma_1 = 171$	$S_a = 342$	
		一次+二次	_	_	$\sigma_2 = 675^{*2}$	$S_{a} = 420$	
脚	SS400	組合せ	_	_	$\sigma_{\rm S} = 28$	$f_{\rm t} = 270$	
基礎ボルト	SS400	引張り	_	_	σ_b =48	$f_{\rm ts} = 202^{*1}$	
本(使ハ/レト		せん断	_	_	$\tau_b = 29$	$f_{\rm s\ b} = 155$	

注記*1 : $f_{t,s} = Min[1.4 \cdot f_{t,o} - 1.6 \cdot \tau_b, f_{t,o}]$ *2 : 算出応力が許容応力を満足しないが,設計・建設規格 PVB-3300 に基づいて疲労評価を行い,この結果より耐震性を有することを確認した。

1.4.3 疲労評価

評価部位	S n (MPa)	K e	S _p (MPa)	S _ℓ (MPa)	S _{@'} * (MPa)	N a (回)	N c (回)	疲労累積係数 N c / N a
胴板								

注記*: $E_0 = 2.07 \times 10^5 \text{ MPa}$ $E = 2.00 \times 10^5 \text{ MPa}$ として補正する。